

ラシード著作全集の編纂

——『ワッサーフ史』

著者自筆写本の記述より——

岩 武 昭 男

I

イランのモンゴル政権であるイルハン朝において、ラシード Rashid al-Din Faḡl-allāh Hamadāni によって著された『集史 (Jāmi' al-Tawārikh)』に関しては、モンゴル帝国史の第一の、かつ最大の史料として、特にその編纂事情と構成、および現存写本の系統に関して、近年再びわが国の研究者の関心を引きつけている⁽¹⁾。ただし、そこでの関心はおおよそモンゴル史研究の枠組みに限定され、そのため、その考察の対象が、『集史』の多彩な側面のうちの、主にモンゴル部族に関する記述に集中してきた。しかし、当時の一般的な、および著者をめぐる、政治的かつ文化的な歴史状況についての考察が、同時に必要であることはいうまでもないことであろう。ラシードの神学著作の研究も進展し⁽²⁾、かつ、彼のワクフ文書の校訂出版によってその利用が容易になるなど、史料状況が大きく変わった現在では⁽³⁾、なおさらのこのように思われる。

筆者は先に、彼のワクフ文書に補遺として付けられた「写本作成指示書」とも呼びうる、ラシード区のワクフ物件の収益を用いて彼の複数の著作の写本を作らせるワクフ条件を記した箇所の訳出を試みた⁽⁴⁾。この「写本作成指示書」は、1309年8月9日に発効したと考えられるものと、それを書き換えて1314年3月下旬に発効したと考えられるものの、2種類のテキストが現存している（前者をテ

キスト PW1 (persian waqfnāma) 1, 後者をテキスト PW2 とする)⁽⁵⁾。ラシードは、その両テキスト共通の条件中で、「ラシード区に架蔵された「元になる写本 (nuskha-yi aṣl)」に合わせる、バグダード紙大判」という大きな判で作成された『集史』を含む複数の自著の各写本を元と比較照合した上で、その写本のように完全な装丁を行うように指示していた⁽⁶⁾。PW1 においては、さらに「元になる写本」に関して、ラシード区からの持ち出しを禁じた上で、部外者であれ誰でも書写をすることが許されていた⁽⁷⁾。

一方、先の拙稿にも触れたように⁽⁸⁾、ラシードの神学著作集『集成 (Majmū'a)』とそれを構成する4書の現存写本のあるものは、「写本作成指示書」の第1のヴァージョン PW1 を、多少の書き換えを持ちながらも（「指示書」での「私 (in ḍa'if)」が「著者 (muṣannif)」に改められている等）、掲載している。そして、この各写本に付けられた「指示書」は、常に『ラシード著作全集 (Jāmi' al-Taṣānīf al-Rashīdī)』の「内容目次 (fihrist)」に続けて書かれている⁽⁹⁾。ここで、これらの写本の来歴を示す一文⁽¹⁰⁾を各写本に掲載した写本作成者たちは、この両者のテキストをつなぐ箇所「内容目次」に続けて次のように述べている。

上述の著者 [ラシード] —— 神がその支持者を高められんことを—— は、上述のこれらの諸書の、個別およびまとめたのアラビア語とペルシア語での書写を命じていたが、[いま新たに] 彼のアラビア語とペルシア語の著作全てがそこに含まれ、我々が要約の形でその内容目次を語った、『ラシード著作全集 (Jāmi' al-Taṣānīf al-Rashīdī)』と名付けられた大きな写本の書写を命じた。そして、それらの写本全体を [この] 大きな写本とともに、タブリーズの郊外にあり「ラシード区 (Rab' al-Rashīdī)」と呼ばれる慈善施設 (abwāb al-birr) の、彼が来世のために建てた大きなドーム (qubba) の中に置かれるように命じた。また、彼は人々が写本を書写することを許していたが、[いま新たに] 毎年その施設のワクフ物件の収益からその大判に合わせて完成させた写本を作成し、イスラムの諸都市の

うちの大都市へ送ることを条件づけた。我々がワクフ文書に書いたこのことを述べている箇所を、この内容目次を読む者がその状況を判るように、その表現通り (bi-tilka l-'ibārati) 我々はここに写す。以下である⁽¹¹⁾。

このように述べて、ワクフ文書補遺「写本作成指示書」を掲載しているのだが、この記述から明らかなおと、ラシード区の墓所となるドームに架蔵された『ラシード著作全集』の大判の「大きな写本」が、すなわちワクフ文書の表現での「元になる写本」であり、ラシード自身の著者公認のテキストということになる。この中に『集史』も含まれているのである。

この『ラシード著作全集』「内容目次」は、これまでも多くの研究者の考察の対象となってきたテキストであるが、ラシードの「著作目録」もしくは「著作計画」に過ぎないと考えられてきており⁽¹²⁾、『ラシード著作全集』そのものの存在は全くといってよいほど考察されてこなかった。しかし、『ラシード著作全集』に関する記述はこのテキストが唯一の情報であるわけではない。小稿は、『ワッサーフ史 (Tārikh-i Waṣṣāf)』に記載された情報を分析することによって、『集史』を含むラシードの著作活動を考察する際の確実な起点を提示することを目的としている。

II

通称『ワッサーフ史』と呼ばれる歴史書は、本来、*Tajziyat al-Amṣār wa Tajziyat al-A'ṣār* という書名を有しており、Shihāb al-Din 'Abd-allāh b. Faḍl-allāh Shirāzī によって著された。この著者は、ラシードの庇護を受け、712年ムハッラム月24日 (1312年6月1日) にラシードの仲介で本書をイルハン、オルジェイトウ Ūljāitū に献呈した⁽¹³⁾。彼は、Waṣṣāf al-Ḥaḍrat 「御前の頌詞者」の称号を得、このことによって、本書は、一般に上記のタイトルで呼ばれているのである⁽¹⁴⁾。本書は、本来、ジュワイニー 'Aṭā Malik Juwaini の『世界征服者史 (Tārikh-i Jahān-gushā)』の続編を意図して書かれており、5巻 (mujallad) からなる。

この『ワッサーフ史』に関しては、その研究史の最初期からイルハン朝史、モンゴル帝国史に対するその史料的価値が知られており、すでに1856年にはその第1巻が、Hammer-Purgstallによってドイツ語訳を伴って校訂出版されている⁽¹⁵⁾。しかし、あらゆるペルシア文学史の概説が、文体の華麗さ、読解の難解さを本書の特徴として挙げるほどに、学術上のテキスト再現は困難を極め、学問的な校訂を経ていない1853年にボンベイから出版された石版本の写真版が未だ全体に関わる唯一のテキストとして用いられ続けている（以下、このテキストを「現行テキスト」と称する）⁽¹⁶⁾。ラシードの著作活動に関する記述も、Quatremèreと上記のHammer-Purgstallによって、1836年と1843年という極めて早い段階で利用されている⁽¹⁷⁾にも関わらず、今日に至るまでなんらの分析もなされないままに看過されてきたのである（もしくは、後に示すように誤った状態で引用され続けてきた）。唯一、van Essによって、ラシードの著作活動とその諸著作完成の下限を考える上で、有効に利用されているだけであるといてもよいであろう⁽¹⁸⁾。

ラシードの著作活動を分析する際には、この『ワッサーフ史』の記述が極めて重要であることは言うまでもないことである。幸い、この記述が収められた『ワッサーフ史』第4巻には、著者による自筆写本が現存しており、宇野伸浩氏のご好意により氏の将来された写本のマイクロフィルムを調査することができた⁽¹⁹⁾。この写本の記述からは、現行テキストでは読解することができなかった点を解明することはもちろん、さらに多くの事実を知ることができる。

本写本は、トルコ共和国のイスタンブル所在でNuru Osmaniye 3297の登録番号を有している。イスタンブル所在のバルシャ語写本のカタログを作成したTauerの調査によると、写本の形態は、24.5×33cmのサイズで、各葉17行、全310葉⁽²⁰⁾。そして、彼がそのカタログに校訂を提示しているのだが、f.250aの文中と末尾のf.310bに、711年シャアバーン月（1311年12月13日－1312年1月10日）に本写本書写が終了したことがコロフォンとして示され、末尾のコロフォンには、「[本書の] 著者と筆者 (mu'allif-hu wa-muḥarrir-hu) は、

至高なる神の僕の中の最も弱き者、恩寵を最も必要とする者 [=私], 'Abd-allāh b. Faḍl-allāh b. Abi Nu'aim である」と記されている。著者自筆の写本であるということがすでに判っている⁽²¹⁾。

ラシードの著作活動に関わる記事は、本写本f.242bに記載されている⁽²²⁾。ところで、この記述の掲載箇所の表側、すなわちf.242a冒頭の1行とその後のf.250aの冒頭2行は、(文の途中から始まる)完全に一致する同じ文章が書かれている。前者は、その前葉の裏f.241b末尾から続けられているが、後者では、その前葉の裏f.249bは、4行だけ書かれて完結しており、以下が空白になっている(小さな文字による注記があるが、これについては後述する)。つまり、f.250aは、f.249bからは直接連続しない。このf.250aは、上に記した第1のコロフォンがその文章ともう一文後の4行目から書かれており、そのコロフォンの直後から、『世界征服者史』からの抜粋を掲載し、これが末尾f.310bまで続く。一方、f.242aは、711年シャウワール月10日(1312年2月19日)の記述から始まっている。つまり、コロフォンに記される書写終了の日付よりも後の日付から始まっていることになる。すなわち、f.242からf.249の8葉は、コロフォンに記された1312年1月初旬に完成した、本来はf.241からf.250に連続していた基本部分を形成する写本に、後に増補されて綴じ込まれた部分であることが判るのである。

この増補部分は、他の基本部分と同一の筆跡とみられる大きなナスフ書体で、ほぼ同じ形式(1葉17行が基準⁽²³⁾)で書かれている。ただし、この増補部分の本文は、現行テキストを完全にはカヴァーしていない。欄外(hāshiya)には、本文に対する書き加え、および書写上の訂正ではなく文意を変更するレヴェルでの書き直しがなされており、その改訂を本文に組み込んだ形が現行テキストにみられる(次章での作業が具体的な検証となる)。さらに、上にも紹介した増補部分の末尾f.249bにおける小さな文字による注記は次のようにいっている。

ここから5, 6葉分欠けている(nāqiṣ ast)。すなわち、
「本書献呈の状況の章(maqāla-yi ṣifat-i 'arḍ-i kitāb),

「gū'i wa chūgān の章」, 「ミスルの状況の補遺 (tatimma-yi aḥwāl-i Mişr)」が落ちている (sāqiṭ ast)。

現行テキストでは、確かにこの書き込みにあるとおりの配列になっており、この写本にはその部分が欠けているのである⁽²⁴⁾。

本章冒頭でも述べたとおり、この写本には欠けている「本書献呈の状況の章」から得られる情報によって、『ワッサーフ史』が712年ムハッラム月24日(1312年6月1日)にイルハンに献呈されたことが判るのだが、当然のことながら献呈された段階ではその献呈の状況がその書に書かれているはずはなく、現行テキストの状況に至る以前に複数の段階があったことを想定しなければならない。この増補部分には、明確な日付としては、712年ラビーI月22日(1312年8月26日)の日付までが記載されている⁽²⁵⁾。

したがって、『ワッサーフ史』第4巻の本写本の上述の増補部分に限定して考えてみると⁽²⁶⁾、想定できる経緯として次のようにいえるであろう。1312年1月初旬に本写本 Nur Osmaniye 3207 基本部分の書写が終了し、作品としての『ワッサーフ史』の初版もこの時までに完成した。そして、同年6月1日イルハンに作品としての『ワッサーフ史』が献呈されたのだが、同年8月26日以降に、上で確認した本写本増補部分本文が執筆される。この時には、献呈の状況等の章が書かれておらず、また、書かれた本文自体も現行のものに比べると簡潔なものであった。そして、その後、数次に互って増補が行われ、本文にも書き加えや書き直しの加筆が施されていったのと平行して、新たな章も書かれたのである。

このように、本写本は、著者が増補を行っている途中の段階(新たな章が書かれる前の段階)で著者の手を放れた写本と考えられる。そして、この増補部分、特にその本文は、その増補の過程を示すいわば自筆「草稿」と考えることができる。

すなわち、問題となるラシードの著作活動をめぐる記述に関しては、「草稿」の段階でその内容を確認できることになるのである。欄外における加筆をみると、本文と同じ筆跡とみられる大きなナスフ書体で書かれたものと、筆跡の判別のできない小さな文字で書か

れたものが混在している。前者は同じく著者が加えたとして問題がないであろうが、後者に関しては、例えば上でみたf.249bの注記のように、おそらく本写本の後世の所有者であった第三者が行った可能性を持つものも含まれている。その場合は、その第三者が、増補がすでに終了したいわば「最終稿」の写本⁽²⁷⁾を手許に持っており、それから書き写していったと考えられ、現行テキストを併せて参照することによって、内容上の保証は得ることができる。次章では、その記述を確認することにする。

III

さて、本写本のこの増補部分は、f.242a の14行目行頭から話題が変わり（“pas”によって導かれる）、ラシードの個人的資質を、プラトンやアリストテレス、ソロモンの宰相アーサフ、アノーシーラワーンの宰相ボブルジュメフルに比して賛美する修辞を凝らした文章が始まる（次ページf.242bの3行目途中まで）。そして、「帝国支配の基礎を整えることに関して、<…… [という]>ヤルリグの命がでた (ḥukm-i yarligh shud ki dar tartib-i qawā'id-i jahāndāri)」として（4行目途中まで；以下同行は空白）、その内容を詩の形式を用いて記している（5行目、6行目）。『ワッサーフ史』の要約を行った Āyati は、この詩の内容を「自身の貴重な書を整理せよ」とまとめている⁽²⁸⁾。ここまでは、写本テキストと現行テキストでは、前者に数語分の欠落があるのみでほとんど変わるところはない。

この詩に続く箇所が、ラシードの著作活動に関わる記述として参照されてきた箇所であり、以下に、活字テキストを掲げ、そのテキストの翻訳を行う。当該箇所は、f.242b 7行目から13行目までであるが、この部分には3箇所で加筆がなされ、そのテキストが欄外の左右に書かれている。写本上、加筆がなされた箇所を示すために、右欄外に書かれている場合（1箇所：ページに対して水平に記載）には、右側が長いV字形の記号が記入されており、左欄外に書かれている場合（2箇所：ページに対して垂直に（ページ右側を上）に90度回転させて）記載）には、左上がりの＼形の記号が記入されている。

欄外に加筆の筆跡はどれも小さな文字であり、その筆跡が著者のものであるかどうかは容易に決定できない。また、本文中、一文が行の中心を走る一本線により（このように）削除されている。

なお、各著作を示す箇所は、煩雑ではあるがペルシア語のローマナイズのまま提示する。また、現行テキストとの異同⁽²⁹⁾、写本上の注記に関しては、上付きの括弧内の数字〔1〕～〔10〕によって校訂テキストに対応させて提示し、訳注として訳出の後に記す。欄外に加筆の挿入箇所も、校訂テキストと対応させて提示し、左右を＼と／の符号で示し、①～③の数字を用いた。〔以下のテキストでは、写本上、文字の識別点のないものも、gāf も含め全て再現した。一方、dāl と dhāl の区別は、写本のまま保存した。母音符号、タシュディード等は、写本に記載のあるものに限り付した。〕

<本文>

- و با حصول این مناقب ثواب اشتهار مصنفات زاده 1. 7
 خاطر اشرف زاده الله اشراقا /^① بر تاویلات قرآنی و توضیحات 1. 8
 برهانی و مباحث سلطانی و لطایف صاحب قرآنی^② و علم 1. 9
 تواریخ و انساب متبنی بر جداول انشعاب که برین نمط در 1.10
 هیچ کتب دیزه نیامده است و برین طرز و ضابطه در هیچ عهد 1.11
 پرداخته نشده زیادت از دو هزار ورقه بر ضعف قطع بغداده⁽¹⁾ 1.12
 تا اوایل شهر سنه اثنی عشره⁽²⁾ \^③ مرتب ومدون گشت 1.13

そして、公刊するというこの輝く榮譽を得て (bā ḥuṣūl-i in manāqib-i thawāqib-i ishtihār), 高貴なる思考——神がその輝きを増さんことを——の産物の諸著作／^①, [それは] Ta'wilāt-i Qur'āni, Tauḍīhāt-i Burhāni, Mabāḥith-i Sultāni, Laṭā'if-i Ṣāḥib-qirāni^②, 'Ilm-i Tawārikh, Ansāb-i Mutabannā bar Jadāwil-i Inshi'āb——このような方法に基づいてはいかなる書にも見られたことはなく、このような方式や規則によってはいかなる時代にも作られたことはなかった——についてであり (bar), [そ

れが] バグダード紙二つ折で (bar di'f-i qaṭ'i baghādidā) 2000
葉以上で⁽¹⁾, [7] ⁽²⁾12年初頭までに\③, 整理され編纂された。

東
洋
学
報

<右欄外>

	①	
(3) <u>موسوم بجامع التصانيف</u>	1. 1	
منقسم بده مجلد هر مجلدی بوزن	1. 2	
دويست من عدل تقريباً كى مجموع	1. 3	
آن سه هزار ورقه باشد مستعمل	1. 4	
بر اضعاف قطع بغداده ⁽⁴⁾ كى	1. 5	
زيادت از شصت هزار دينار رايج	1. 6	
در اجرت نسخ و تحرير و نقش و	1. 7	
تصوير و جلد و ترسييس ⁽⁵⁾ صرف	1. 8	
شده مشتمل	1. 9	

① *Jāmi' al-Taṣānif* と名付けられ⁽³⁾ 10巻に分けられ, 各巻が
200man-i 'adl の重さがあり, バグダード紙二つ折に書かれて
(*musta'mal bar aḍ'āf-i qaṭ'i baghādidā*)⁽⁴⁾ その全体で3000葉
あるのだが, 書写・編纂・挿絵作成・作図・製本・装丁 (*tarsis*)⁽⁵⁾
の賃金に60000dinār-i rā'ij 出費され, [以下の書] からなる
(*mushtamil [bar]*)

<左欄外>

	②	
و اسوله و اجوبه متفرق و احيا ⁽⁶⁾ و اثار در فلاحه و عمارت و ابطال مذاهب	1. 1	
تناسخ و ناسخ ايشان در [منع و معارضه استدلال بآيات] ⁽⁷⁾	1. 2	
بيست و دوگانه از مصحف مجيد و بيان الحقايق و [صفت] ⁽⁸⁾ اقاليم [سبع] ⁽⁹⁾		

第七十八卷
五二〇

② As'ila wa Ajwiba-yi Mutafarraḡ, Aḡyā⁽⁶⁾ wa Āthār dar Filāḡhat wa 'Imārat, Ibtāl-i Madhāhib-i Tanāsukh wa Nāsikh-i Īshān dar [Man' wa Mu'āraḡa-yi istidlāl ba-Āyāt-i]⁽⁷⁾ bist-o-dogāna az Muṣḡhaf-i Majid, Bayān al-Ḥaḡqā'iq, [Ṣifat-i]⁽⁸⁾ Aḡālim-i [Sab']⁽⁹⁾

③
جامعاً بين الترجمة و التعريب 1. 1

③ 全体的に [相互に] ペルシア語訳とアラビア語訳を行い (jāmi'an baina'l-tarjama wa'l-ta'rib⁽¹⁰⁾)

現行テキストとの異同；写本上の注記

- 1 写本上一本線により削除されている
- 2 現行テキストには، **و سبعمایه** が追加 (TW/text: 539, 1.5)
- 3 現行テキストには欠落 (TW/text: 538, 1.25)
- 4 **بغاوره** (TW/text: 539, 1.1); “baghādida” は “baghdādi” の複数
- 5 この語形では「緑青で覆うこと」という意味になろうが，他にふさわしい語を見いだせなかった。Āyati は，“ṣaḡḡḡāfi” 「装丁，製本」の語に置き換えており (TW/taḡḡrīr: 302)，いまはこれにしたがって訳出する
- 6 **اخبار** (TW/text: 539, 1.2)
- 7 5, 6 語判読困難；現行テキストより再現 (TW/text: 539, 1.3)
- 8 1 語分判読不能；現行テキストより再現 (TW/text: 539, 1.3)；**صور** とも読める
- 9 1 語分判読不能；現行テキストより再現 (TW/text: 539, 1.4)
- 10 **التقريب** (TW/text: 539, 1.5)

IV

ここで、テキストに関わる事項に限定して、訳出に関する注記を行いながら、いくつかの点を確認していくことにする。

まず、本文の12行目の一文（テキストの注〔1〕の箇所）が削除されているが、これを改訂したのが右欄外の加筆①であることが確認できる。本文記載の段階では「2000葉以上」とだけあったものが、加筆の改訂では「10巻に分けられ、各巻が200man-i 'adl の重さがあり」、「全体で3000葉」とより具体的な記述に書き改められている。左欄外の加筆②は、ラシードの著作の情報をより充実させ⁽³⁰⁾、加筆③もより具体的な情報をもたらすものとなっている。前章で述べたように、これらの加筆の改訂を所定の位置に組み込み連続させたものが、現行テキストの記述と一致しているのである。この本文を「草稿」と見なすことができるとしたのは、これゆえである。

そして、これらの加筆が、本文の文法上の構造を崩すことがないように配慮されて書かれていることも判る⁽³¹⁾。加筆が組み込まれた現行テキストの文章は複雑であるが、加筆前の本文を見ると単純な構造になっている。なお、10行目から12行目にかけての“ki”に導かれる関係節⁽³²⁾が、直前の Ansāb-i Mutabannā bar Jadāwil-i Inshī'āb（すなわち「系譜集」）のみにかかることは、第VI章で引く同時代の別の証言の同種の表現から確定できる。

さて、以上行った予備的な考察を前提として、この記述を確認することによって、研究史上にどのような修正を加えることができるであろうか。まず第1に確認されることは、次のことである。

現在、『集史』の最終的な完成年代として、Storey（および Брегельによるロシア語訳）の紹介記事では、712/1312-13年という日付が下限として挙げられている。この年までに、特にオルジェイトウ史が完成したとし、それはマシュハドに存在する写本のみに保存されているらしいとするのである⁽³³⁾。この説の前半は、『ワツサーフ史』への Quatremère の言及に基づき、後半は、Barthold の記述が参照指示されている。後者から確認すると、Barthold は、Togan に

よって1923年にマシュハドで発見された写本にオルジェイトゥ史が含まれていることに言及しているのであるが⁽³⁴⁾、その「オルジェイトゥ史」は「ワッサーフによると、712年まで書き継がれた」として、やはり Quatremère の記述を根拠として挙げている⁽³⁵⁾。先の Storey の説の前半と、この Barthold の記述の双方が挙げる Quatremère の記述の、参照指示の対象の箇所は同じであり、Quatremère の記述が全ての元になっていることが判る。Quatremère はそこで、「しかしながら、我々は、『ワッサーフ史』の著者から、我々の作家 [ラシードのこと：岩武注記] が、彼の作品をヒジュラ暦712年まで書き継いだことを知るのである；しかし、おそらく、この情報は、その歴史書の、スルタン・オルジェイトゥ、すなわちホダーバンダの生涯を物語る箇所のみ当てはまる」と述べている⁽³⁶⁾。

しかし、この Quatremère が根拠とした『ワッサーフ史』の記述は、前章での分析から確認できるように、ラシードの著作全集の編纂に関わる記事であり、「712年初頭までに、整理され編纂された」のは、単に『集史』（ここでは “‘Ilm-i Tawāriḫ” と表現されている）のみではなく、それを含むラシードの「諸著作 (muṣannafāt)」であるとする解釈以外にはありえない。これが、加筆箇所にあるように、「*Jāmi‘ al-Taṣānif* [すなわち、『著作全集]] と名付けられているのである。この記述は、『著作全集』の編纂年代を確定する情報ではあるが、『集史』の完成年代を、間接的にはともあれ、直接示すものではない。

このように、Barthold, Storey, Брегель は、『著作全集』の存在を念頭におかず、また、自ら『ワッサーフ史』の記述を参照することなく（もしくは、文体の複雑さに惑わされて）、この Quatremère の曖昧な（「おそらく (probablement)」と推量しているにすぎず、また『集史』に限定して考えていると思われる）記述を引き継ぎ、確定したこととして論じてしまっているのである。

これまでの研究者が無視してきたといってもよい『著作全集』を改めて想定し直すことが必要である。

これまでラシードの「著作目録」もしくは「著作計画」と考えられてきた『ラシード著作全集』「内容目次」は、Quatremèreが校訂した、710年(1310年5月31日-1311年5月19日)中に書写された『集成』パリ写本掲載のものを最古のものとして複数存在している⁽³⁷⁾。ここでは、全体が2つの qism に分かれ、2つの qism がそれぞれ2つの bāb に分かれる。第1 qism の第1 bāb が、全体で『集成』と題され、4つの kitāb として神学論文集4作品 (*al-Taūdhāt* 『注釈集』, *Miftāḥ al-Tafāsir* 『コーラン注釈の鍵』, *al-Sultāniya* 『スルターン(対話)』, *Laṭā'if al-Ḥaqā'iq* 『真理の精妙』) がそこに属し、第2 bāb に2つの kitāb, *Bayān al-Ḥaqā'iq* 『真理の明示』, *al-Āthār wa al-Aḥyā* 『遺物と生物』(いわゆる「農書」) が属す。一方、第2 qism の第1 bāb が『集史』であり、これが4つの mujallad に分かれ、(1)トルコ・モンゴル史、(2)オルジェイトゥ史を含む世界諸民族史、(3)*Shu'ab al-Ansāb* 『系譜の分歧』(=「系譜集」)、(4)*Ṣuwar al-Aqālim* 『気候帯の諸状況』(=「地理書」)の構成をとっている。この4部構成という点がこれまで様々な議論を呼び起こしてきたのである。第2 bāb は、「中国(Khaṭā)の人々の言葉から」の翻訳として、4 kitāb が掲載されている。(1)中国の医学 (*ṭibb ahl al-Khaṭā*)、(2)中国の薬学、(3)モンゴルの薬学、(4)政治学に係わる4作品である(明確な書名は掲載されず、内容が表示されている)。

一方、本稿第三章で提示した『ワッサーフ史』が記載する『著作全集』の内容を、以下のように提示することができる。ただし、加筆部分で「10巻に分けられ」としているが、どのように10巻となるのかは、この記述からだけでは決定できない。11まで番号付けを行い、左欄外②の加筆箇所が上がっているものには番号に下線を付す。また、ここでは、書名と関連づけながらも明確な書名の形ではなく、内容を説明する形で記載が行われているが、上の「内容目次」と一致する場合には、大文字で始めイタリック体にし、その対応を<>内に、例えば、第1 qism の第2 bāb, 第1 kitāb (すなわち

Bayān al-Ḥaqā'iq [真理の明示]) と一致する場合は < I - ii - 1 > と提示する。

1. ta'wilāt-i Qur'āni 「コーラン注解」 < I - i - 2 >
2. *Tauḍīḥāt-i burhāni* 「論証的注釈集」 < I - i - 1 >
3. *Mabāḥith-i Sulṭāni* 「スルターン対話」 < I - i - 3 >
4. *Laṭā'if-i ṣāhib-qirāni* 「サーヒブキラーンの精妙」 < I - i - 4 >
5. as'ila wa ajwiba-yi mutafarraḡ 「種々の問答」
6. *Aḥyā wa Āthār dar filāḥat wa 'imārat* 「耕作と農耕における生物と遺物」 < I - ii - 2 >
7. ibṭāl-i madhāhib-i tanāsukh, wa nāsikh-i ishān dar [man' wa mu'āraḡa-yi istidlāl ba-āyāt-i] bist-o-dogāna az Muṣḥaf-i Majid 「輪廻の宗派の否定, および聖なる書 [クルアーン] の22の節から導き出される禁止と反論においての彼らの排除 (nāsikh)⁽³⁸⁾」
8. *Bayān al-Ḥaqā'iq* 「真理の明示」 < I - ii - 1 >
9. ṣifat [*Šuwar*]-i *Aqālim*-i [sab'] 「7気候帯の性質 (諸状況)」 < II - i - 4 >
10. 'ilm-i *Tawāriḡh* 「歴史学」 < II - i - 1, 2 >
11. *Ansāb-i mutabannā bar jadāwil-i inshi'āb* 「分岐する線上に採られた諸系譜」 < II - i - 3 >

このようにリスト化してみても瞭然のように、上記の5と7を除く全ての著作が、先の「内容目次」掲載の書に全て含まれている。逆に、「内容目次」掲載書のうち、第1 qism 第1・第2 bāb, 第2 qism 第1 bāb に含まれる全ての書が、ここに挙がっている一方で、第2 qism 第2 bāb に属す「中国の人々の言葉から」の翻訳4書が、ここでは欠けている。

この相違の原因は、この両者の時間のずれに求めることができる。先にも記したように『著作全集』「内容目次」の最古のものは、710

年(1310-11年)に書写された写本に付随しているが、そのテキストには、「写本作成指示書」の第1のバージョン(PW1)が連続している⁽³⁹⁾。元の「指示書」は、ラシード区ワクフ文書の補遺として、ワクフ文書と同じ709年ラビーI月1日(1309年8月9日)に発効している(現存のPW1はこれをそのまま保存していると考えられる)。そこで写本作成が指示されているのは、「内容目次」での第1 qism 第1・第2 bāb, 第2 qism 第1 bābにあたる、『集成』、『遺物と生物』、『真理の明示』、『集史』であった。第2 qism 第2 bābが欠けているものの、明らかにいくつかの写本に保存されている『著作全集』「内容目次」と密接なかかわり合いを持っている。

一方、この第1のバージョンを書き換えて713年ズルヒツジャ月初旬(1314年3月下旬)に発効したと考えられる第2のバージョン(PW2)も存在している。ここでは、第1バージョン(PW1)と同一のものに、2書が追加されて写本作成が指示されている。この追加分の一方は、このワッサーフが記述する『著作全集』構成著作の1つとはっきりと一致している。5番目に現れる『問答(As'ila wa Ajwiba)』である。これは、「内容目次」には掲載されていない作品である。

このように、「写本作成指示書」の2つのバージョンと関連する形で、ラシードの『著作全集』にも2つの段階があったことが確認できる。「内容目次」の執筆自体は、710年(1310-11年)以外の年次を示す材料はないが⁽⁴⁰⁾、ワクフ文書補遺「写本作成指示書」がそこで列挙した著作の書写をする際に参照を義務づけた「元になる写本」(「内容目次」の提示者の記述(第I章参照)中の「大きな写本」)の存在を考えると、その発効の日付709年ラビーI月1日(1309年8月9日)以前に『著作全集』そのものはおおそ成立して、ラシード区のドームに架蔵されていたことになろう。これを「第1次」の『著作全集』の編纂と考えることができ、『著作全集』「内容目次」は、その構成を示している。

その後、711年(1311年5月20日-1312年5月8日)中に『問答』が完成し⁽⁴¹⁾、新たにオルジェイトウの命を受けて『著作全集』の

編纂が開始され、それが712年（1312年5月9日－1313年4月27日）初頭までに完成したのである。これを「第2次」『著作全集』編纂とすることができる。『ワッサーフ史』が記録するその構成では、かつての『著作全集』「内容目次」にあった翻訳書は割愛され⁽⁴²⁾、新たに『問答』と「輪廻」の否定に関する著作が加えられている。この新たな『著作全集』の完成を受けて、「写本作成指示書」の第2のヴァージョンが書かれ、713年ズルヒッジャ月初旬（1314年3月下旬）に発効したと考えられる。

先の拙稿にも示したように、この間に、ラシード区の中心施設のラウダにおける「元になる写本」（＝『著作全集』原本と考えられる）の架蔵場所も墓所としてのドームから図書室に変更され、ラシードの蔵書内容が自著も含め充実していったことが窺えるのである⁽⁴³⁾。

VI

以上の『著作全集』の編纂過程とその構成の考察を基に、『集史』について確認できるいくつかの点に触れておきたい。

1. 『集史』については、まず、その完成年代に関して様々に論じられてきた。通説とされているのは、710年（1310-11年）であるが、このように記す Browne, Barthold, Storey 等は、なんらの根拠も挙げていない⁽⁴⁴⁾。しかし、Jahn が既に述べているとおり、この710年という年は、Quatremère が提示した「内容目次」を掲載する『集成』パリ写本の書写年にすぎない⁽⁴⁵⁾。このことに基づいて、Jahn は、710年『集史』完成説を否定し、この年は「『集史』精良写本がタブリーズに彼が建てたモスクの図書館に収納された」年であるとしている⁽⁴⁶⁾。しかし、その後利用可能になったラシード区ワクフ文書の分析を通じて、前章末尾のように、709年（1309年）にはタブリーズのラシード区の「ラウダ」と呼ばれる施設（モスクではなくマドラサに近い）のドームに既に架蔵されていたことを知ることができる。

2. 『集史』初版3巻（『集史』「序文」に示される「トルコ・モンゴル史」「世界諸民族史」「地理書」の3巻であろう）は、ラシードの

神学著作『注釈集』序文の情報から、van Ess が示すように、その執筆命令がオルジェイトゥによって出されたと考えられる705年(1305年7月24日-1306年7月12日)には一応完成していたことになる⁽⁴⁷⁾。ただし、当時の著作活動の慣行を考えると、その後度々の加筆があったことを前提にしなければならない⁽⁴⁸⁾。

3. 「第1次」『著作全集』「内容目次」には、『集史』の第3巻として「系譜集」が挙がっており第4巻が「地理書」の4巻構成になっている。『ワッサーフ史』が記録する「第2次」『著作全集』の構成を見ても、「系譜集」と「地理書」は挙げられており、それが書かれたことに関しては疑う理由はないように思われる。ここでは、「地理書」に関しては論じることを避け⁽⁴⁹⁾、「系譜集」について一、二情報を提示しておく。van Ess は、ラシードの神学著作『スルターン対話』にカリフ等の系図が描かれており、これを中間形態として、『スルターン対話』の完成(706年中)以降に「系譜集」が編まれたことを示唆している⁽⁵⁰⁾。また、730年(1329-30年)まで記述したほぼ同時代のハムドゥッラー・ムスタウフィー Hamd-allāh Mustaufi の年代記『選史 (Tārikh-i Guzīda)』の「結 (khātima)」は、

系統樹の形式での預言者・聖者・イマーム・帝王・ワズィール・その他の者の系譜に関して (dar dhikr-i ansāb-i anbiyā wa auliya wa a'imma wa pādshāhān wa wuzarā wa ghair-hum bar sabīl-i shajara)

という表題を持ち、以下のように語っている。

この図 (ṣūrat) は、makhdūm-i sa'īd Khwāja Rashīd al-Haqq wa'l-Dīn が発案した。実によい方法であり、彼以前には、誰もこの方法を用いなかった。しかしながら、同時代の人でさえその名前を異なって記していたり、[系譜の]前後が信頼できなかつたり、王やワズィール・ハーキム・スンナのイマームの名を全く語っていなかつたり、我らの預言者ムハンマド・ムスタファーおよびイスマアイルに遡る父祖の系譜の説明を彼らの何年も後の人たちから引いていたたり、12人の不謬の

イマームの名を完全には語っていなかったりというように、多少留意の足りない点もあり、また、先に延ばした線が多くに分かれすぎていたり、また判りにくかったりすることもあって、接ぎ木によって、その木によりよい果実を实らせようと私は考えた。このために、私は、完全にすべくそれに接ぎ木を行った。この木は、預言者・イマーム・ハーキム・王・ワズィール・何人かの教友に関して判りやすく書かれた。……(51)

このように、ラシードが「系譜集」を作成したことに関しては疑問の余地がない。一方、Togan によって発見された『五族譜 (Shu'ab-i Panjgāna) 』が、このラシードの「系譜集」であることに関しては、疑義も存在しているが、ムスタウフィーがここで述べているように、ラシードとほぼ同時代の段階で、ラシードのものは改良の対象になっているのである。残念ながら、この系図を掲載した『選史』の写本は未だ発見されていないため、実際に比較することは不可能であるが、『五族譜』も当然その書写段階を含めて改変がなされていることが予測できよう(52)。

「系譜集」を含め、『集史』のラシードの手による最終版は、712年初頭の「第2次」『著作全集』に収められたものになるはずである。その構成を記録するワッサーフは、『集史』に関しては「地理書」「歴史学」「系譜集」を並列に列挙するだけである。しかも、ワクフ文書補遺「写本作成指示書」では、『集史』に関しては、「早くに失われてしまわないように、[何巻がよいか] ムタワッリーがよいと考えた巻数で」写本を作成するようにと条件づけられており(53)、4巻で完本となるかどうかには、著者ラシード自身もそれほど留意していない。現存『集史』の「序文」における3巻構成に「第1次」『著作全集』「内容目次」上で「系譜集」が加えられていると考えて間違いないであろう(54)。

VII

イルハン朝史やモンゴル帝国史の研究にとって『集史』の着実な読解が不可欠であることは、本田實信氏の一連の研究が提示した様々

な成果⁽⁵⁵⁾のおかげで、日本の研究者にとっては自明のこととなってきている。その方向性は、元朝研究等のモンゴルの東方での活動の研究にも新たな地平を開いてきた。しかし、冒頭にも記したように、近年の研究、特に写本分析を行う諸研究は、詳細な分析によって有益な情報を提示していながらも、トルコ＝モンゴル系部族の動向のみを歴史の決定要因と先験的に見なしているためであろうか、『集史』が書かれた環境であるイルハン朝下の政治および文化の実態に不思議に思えるほど無関心であるため、その結論に関しては留保せざるを得ない結果に終わっている⁽⁵⁶⁾。

一方で、その『集史』が書かれた環境であるイルハン朝下の政治および文化の実態を究明する際には、やはり『集史』を含むラシードの著作が最重要の史料の一つとなる。本稿では、ラシードの著作活動に関して、その確実な起点となりえる事象を探るため、様々に議論されている『集史』自体にはいったん距離をおき、ラシード自身の記述も含め、ワッサーフ等の同時代の記述から、ラシードの諸著作が収斂することになる彼の『著作全集』の編纂過程を論じてきた。この作業を通じて、『集史』をめぐる理解も多少なりとも深めることができたものとする。もちろん、未だ多くの謎が残されており、本稿の考察によって全てが解決したわけではない⁽⁵⁷⁾。ただ、本稿がラシードの著作そのものの文献学的研究、およびその著作に基づいた歴史学研究の歩みを一步でも進めることに貢献できたなら幸いである。

そして、本稿の考察に基づいて、さらに考察を進めるならば、この『著作全集』の編纂自体を、イルハン朝下の文化状況を象徴する最良の事象としてみなすことも可能となる。その点では「法学」を直接論じた作品が見あたらないことは重要な要素であるかもしれないが、少なくともここで関連する次の点を指摘して結びにかえたい。

「写本作成指示書」第2のヴァージョンの追加分には、先に述べた『問答』と『論点研究 (*Tahqīq al-Mabāḥith*)』という作品が追加されている。後者はこれまで全く言及されることのなかった作品であるが、「第2次」『著作全集』の構成から考えると、これが他に

対応する作品を持たない「輪廻の否定」（上記リストの7番）のテーマにあてられた論文集であることが考えられる。ラシードは「第1次」『著作全集』にも収められている『集成』収録の複数の論文で輪廻の否定の問題を扱っており⁽⁵⁸⁾、また、『集史』『インド史』もこの問題と関連づけられている⁽⁵⁹⁾。この同定の問題は決定はできないものの、少なくとも『著作全集』の「第1次」編集時に収められていた「中国の人々の言葉から」の翻訳書を、オルジェイトウの命を受けての「第2次」編集に際して割愛し、それに代えて輪廻の否定に関する著作を収めていることは、アルゲンや仏教名を有したガイハトゥ以来のイルハン朝史の流れの中で、ガザン、オルジェイトウの2代のイルハンの時代に大きくイスラムに移行し、かつ東方元朝との距離を拡大させていったイルハン朝モンゴル政権の変化⁽⁶⁰⁾を如実に物語っているといえるであろう。

註

- (1) 例えば、白岩一彦「『集史』パリ写本 (Supplément persan 1113) について」『オリエント』34-1 (1991)、同「『集史』研究の現状と課題」『日本中東学会年報』10 (1995)、赤坂恒明「『五族譜』と『集史』編纂」『史観』130(1994)、同「『五族譜』モンゴル分支と『集史』の関係」『早稲田大学大学院文学研究科紀要』41-4 (1996)、志茂智子「ラシード・ウッディーン『モンゴル史』——『集史』との関係について——」『東洋学報』76-3・4 (1995)、志茂碩敏『モンゴル帝国史研究序説』東京大学出版会 1995、「序章」(pp.1-18) [書評：渡部良子、『史学雑誌』105-4 (1996)] 等。
- (2) J. van Ess, *Der Wesir und seine Gelehrten*, Wiesbaden 1981 が最も重要な研究であろう (岩武昭男「ラシードウッディーン」の著作活動に関する近年の研究動向」『西南アジア研究』40 (1994) [以下、岩武「研究動向」と略記] 参照)。
- (3) 史料状況の変化、研究の進展により、イルハン朝史自体が大きく書き換えられつつある。特に、C. Merville, "Pādshāh-i Islām: the Conversion of Sultan Maḥmūd Ghāzān Khān", *Pembroke*

Papers 1 (1990) の公表によって、ガザンのイスラム受容の評価は決定的に変化した。Merville の紹介したアラビア語史料に基づくガザン像、そのイスラム受容の経緯 [ノールーズ Nōrūz の主導により気弱な青年ガザンが、既にイスラム化していたモンゴル軍の支持をとりつけるため改宗した、という改宗の指導を行った著名なウラマー兼スーフィーが伝える情報] は、例えば、J. Aubin のイルハン朝史を完全に書き換えた概説にも取り入れられており (*Émirs mongols et vizirs persans dans les remous de l'acculturation*, (*Studia Iranica*, Cahier 15), Paris 1995, pp.59-60), わが国においても、既に、故安藤志朗氏による斬新な概説に示されている(「トルコ系諸王朝の国制とイスラーム」『世界に広がるイスラーム』堀川徹編：講座イスラーム世界3, 栄光教育文化研究所 1995)。また、イラン史におけるイルハン朝史の位置付けがいかに変化したかを見るには、A. K. S. Lambton, “Preface to the 1991 Impression” of *Landlord and Peasant in Persia*, London - New York 1991 が参考になろう。

- (4) 岩武昭男「ラシード区ワクフ文書補遺写本作成指示書」(関西学院大学東洋史学研究室編)『アジアの社会と文化』(法律文化社 1995) [以下、岩武「指示書」と略記]。最近出版された、S. S. Blair, *A Compendium of Chronicles. Rashid al-Din's Illustrated History of the World*, (Nasser D. Khalili Collection of Islamic Art, Vol.27), Oxford - New York 1995 に、W. M. Thackston による同箇所の英訳が付録として発表されているが(pp.114-15), 同ワクフ文書の校訂本にのみ基づき、不十分かつ不正確である。
- (5) 双方のテキストとも発効の日付には留保が必要であるが、以下の議論では大きな問題とはならない。詳しい議論は、岩武「指示書」, pp.289-90.
- (6) 岩武「指示書」, pp.292-94, 300.
- (7) 岩武「指示書」, p.298.
- (8) 岩武「指示書」, pp.288-90.
- (9) 岩武「指示書」, p.279.

- (10) 例えば、「〇〇全集刊行の辞」を全集各巻に掲載するといったようなことをイメージできると思う。
- (11) É. Quatremère, *Raschid-eldin, Histoire des Mongols de la Perse*, Paris 1836 [reprint: Amsterdam 1968], pp.clxi-clxiv. 本稿準備中に, *Majmū'a*, ms. Bibliothèque Nationale [Paris], Arabe nr.2324 をマイクロフィルムで入手することができ, 記述を確認することができた (以下, 『集成』「パリ写本」と称し, *Majmū'a/Paris* と略称)。*Majmū'a/Paris*: 2b に見ることができる。
- (12) その研究史に関しては, 本田實信「『ラシード全著作目録』について」『西南アジア研究』23(1984) [同『モンゴル時代史研究』(東京大学出版会 1991) に再録], および, 岩武「研究動向」, pp.56-57, 65 (n.4) 参照。
- (13) TW/text: 544; TW/taḥrīr: 304. この略号については, 註16参照。
- (14) この史書の名として『ワッサーフ史 (*Tāriḫ-i Waṣṣāf*)』の名称も一般に定着していた。実は, 現行テキスト本文においても『ワッサーフ史』の書名がテキスト上に記載されている [TW/text: 558]。ただし, この箇所は, 小稿で参照する著者自筆写本 (後述。なお, 註19, 20参照) では, 「この史書 (in tāriḫ)」として記されている [TW/ms: f.250a]。後の写本において書き換えられ, それが現行テキストに残されていることが判る。
- (15) *Geschichte Wassaf's*, Persisch herausgegeben und Deutsch übersetzt von Hammer-Purgstall, Wien 1856.
- (16) *Tāriḫ-i Waṣṣāf al-Ḥadrat dar Aḥwāl-i Salāṭin-i Muḡhūl*, Tehran 1338/1959. 以下, TW/text と略称。このテキストに基づく要約として, 'Abd al-Muḡammad Āyatī, *Taḥrīr-i Tāriḫ-i Waṣṣāf*, Tehran 1349/1970 が出版されており, 以下, TW/taḥrīr と略称して参照する。
- (17) Quatremère, *Histoire des Mongols*, p.lxxi, J. von Hammer-Purgstall, *Geschichte der Ilchane in Persien. 1200-1350*, Band 2, Darmstadt 1843 [reprint: Amsterdam 1974, 2 Bände in 1],

pp.220-21. なお、註22, 25を参照。

- (18) van Ess, *Der Wesir und seine Gelehrten*, pp. 6 (n.26), 43 (n.2), 59. ただし、テキストの分析は、行われていない。
- (19) TW/ms と略称する。宇野氏に対する感謝の意をここに特に記して申し上げたい。ありがとうございました。
- (20) F.Tauer, “Les manuscrits persans historiques des bibliothèques de Stanboul. III”, *Archive Orientální* 3 (1931), p.467 (No. 326).
- (21) Tauer, *ibid.*. 文中である前者 (f.250a) の位置にコロフォンが記されていることは、後述のようにこの写本のあり方を考察する場合、注目に値する。なお、ここでは、さらに同月の「下旬 (awākhir)」に完成したとし、後者 (f.310b) のコロフォンでは、同月の月名までの記載で終わっている。すなわち、この間 (ff.250a-310b) は、月末までの数日間で書き上げられたことになる。
- (22) TW/text: 538-39; /tahrir: 302-03 に相当する。なお、Quatremère が参照する写本は、当時の “Bibliothèque du roi” 所蔵写本であり (*Histoire des Mongols*, p.x, et al.), その fol.427r を参照指示している。この写本は現在、Bibliothèque Nationale, Supplément persan, nr. 208 として登録されている (E. Blochet, *Catalogue des manuscrits de la Bibliothèque Nationale*, 1, Paris 1905, pp.282-83 (nr.449). 写本冒頭に “BIBLIOTHEQUE ROYALE” の押印を有する)。アラビア数字と算用数字の2種の葉数提示をもつが、アラビア数字で 426b-27a, 算用数字で 428b-29a が当該箇所である。この箇所を含む第4巻は17世紀後半の書写である。
- (23) 書き込みを考慮に入れず表題 (‘unwān) 部分を2行に数えて、ff.242a-243b : 17行, ff.244a-245a : 19行, ff.245b-246a : 18行, ff.246b-247a : 16行, ff.247b-249a : 17行, f.249b : 4行 (以下空白) という形態である。
- (24) 増補部分は、現行テキスト TW/text: p.537, l.19 - p.544, l.3 に相当する。本写本に欠けている箇所は、現行テキスト TW/text: p.544, l.3 - p.557 の部分である。
- (25) TW/ms: f.245b, ll.8-9; /text: 541; /tahrir: 304.

- (26) 本稿は、本写本全体に関わる考察を行う任にはない。当該の増補部分は、前後の基本部分の本文が枠線で囲まれているのに対して、枠線を持っていない。本写本には何カ所もそのように枠線を持っていない部分がある点のみ報告しておく。
- (27) 現行テキストは本写本にみられない文章も特に章の移行部分にみられる。本写本以降の増補も取り込んで、全てを連続した形で文章化した「最終稿」のテキストが現行テキストの元になっていると捉えることができる。このことは、註22で触れたパリ写本においても確認できる。
- (28) TW/taḥrīr: 302. ここで、筆者による不確実な詩の解釈を提示することは控えることにする。
- (29) 註22で挙げたパリ写本も確認したが、現行テキストと、数語異なるところはあるものの基本的には一致している。書写が新しいこともあり、以下では現行テキストに代表させて示すだけにする。
- (30) ただし、本文と欄外に書かれた諸著作の間で完成時期に時間の経過があったことは考えにくい。この本文の記述がなされた時点で、左欄外②に挙げられた作品のうち完成していたことが確認できるのは、第V章のリストの6, 8, 9番であり、711年中に完成していた5番(註41参照)も含めることができる。
- (31) 例えば、加筆①の末尾“mushtamil”は、本文の“bar”に直接連続するが(併せて「[以下の書]からなる」と訳出)、本文の“bar”(「についてであり」と訳出)が“muṣannafāt”を修飾している点には変更がない。
- (32) “ki bar-in namaṭ pardākhta na-shuda”「このような方法に基づいてはいかなる書にも見られたことはなく、このような方式や規則によってはいかなる時代にも作られたことはなかった」
- (33) C. A. Storey, *Persian Literature*, Vol.1, Part 1, London 1927-39 (reprint: 1989), p.72, Ч. А. Стори (Ю.З.Брегель), *Персидская Литература*, Москва 1972, стр. 305.
- (34) W. Barthold, *Turkestan down to the Mongol Invasion*, 4th edition, London 1977, p.47 (n.4).

- (35) *op. cit.*, p.45 (n.4).
- (36) Quatremère, *Histoire des Mongols*, p.lxxi, 註17と同箇所。
- (37) Quatremère, *Histoire des Mongols*, Appendice, pp.cxlx-clxi. 本田『『ラシード全著作目録』について』, p.73, および岩武「指示書」, pp.278-80 参照。Quatremère のテキスト以外に, 先行研究で紹介された写本(部分)や他の写本を参照したが⁸(岩武「研究動向」, p.65 (n.3) 参照), 今回 Quatremère が基づいた Majmū'a/Paris: 1b-2b をも確認できた。各作品の書名の翻訳は, 本田氏の訳語を参照させていただいた。なお, *Tauḍihāt* を岩武「指示書」では, 『解明』と訳したが, 今回『注釈集』の訳に変更した。
- (38) テキストが確定できなかったこともあり, 後半部分の明確な意味の把握を現時点ではできなかった。試案に留まる点, ご了承いただきたい。
- (39) 以下の詳細は, 岩武「指示書」, 特に pp.286-91参照。
- (40) 本田『『ラシード全著作目録』について』, p.73によって紹介された706年に著作目録が執筆されたとする Мугинов の説に関しては, 岩武「研究動向」, pp.58-59参照。
- (41) van Ess, *Der Wesir und seine Gelehrten*, pp.43-44, 59.
- (42) この翻訳書のうち医学に関する書は, 713 (1313) 年書写の写本が残され, 羽田亨一氏によって中国語原本も特定されるに至っている(『ペルシア語訳『王叔和脈訣』の中国語原本について』『アジア・アフリカ言語文化研究』48-49(1995))。そこに掲載される“Tānksūqnāmayi Īlkhān dar Funūn-i 'Ulūm-i Khatā'i”と題された翻訳書全体に互る内容目次も羽田氏によって示されている(同論文, pp.720-21)。『全集』「内容目次」との構成上の齟齬に関してそれが企画段階であったとする解釈, 本翻訳書が未完成であったとする点等の, ラシード著作上での位置付け(同論文, pp.722-23)は, 本稿の考察によって再考されねばならないと考えるが(第V章および第VI章での『集史』に関する考察を参照, 特に前者に関しては註58の事例を, 後者に関しては註48を参照), 少なくともこの翻訳書群が実在し, その写本が作成されていたことが判る。

- (43) 岩武「指示書」, p.300 参照。
- (44) E. G. Browne, *A Literary History of Persia*, vol.III, Cambridge 1902 (reprint with change of title: 1928; reprint: 1984), p.72, Barthold, *Turkestan*, p.45, Storey, *Persian Literature*, p.72.
- (45) K. Jahn, “The Still Missing Works of Rashid al-Din”, *Central Asiatic Journal* 9 (1964), pp.113-14.
- (46) *op. cit.*, p.116. (本田「『ラシード全著作目録』について」, p.73 の紹介記事を参照)。Jahn は, Quatremère の「ヒジュラ暦710年に, 完全なその作品が, 起草され書写され製本されて, タブリーズの町に Raschid-eldin が建てたモスクの図書館に収納されたことを我々は知っている」(*Histoire des Mongols*, p.lxxi) という記述を参照指示している。この記述が一方で710年『集史』完成説を生み出したと思われる。
- (47) van Ess, *Der Wesir und seine Gelehrten*, pp.9, 13, 57. 岩武「研究動向」, pp.58-59, (Majmū'a/Paris: 54b-55a)。『スルターン対話』の情報に基づく706年という説 (Jahn, “The Still Missing Works of Rashid al-Din”, p.114 [Мугиновに基づく]; Брегель, *Персидская Литература*, стр. 305) より早い段階になる。
- (48) 本稿で示した『ワッサーフ史』の加筆の例を見ても明らかである。このように, 増補を前提にした作品分析の研究の例として, 本稿に関連する時代に関しても, J. Aubin, “Un chroniqueur méconnu, Šabānkāra'i”, *Studia Iranica*, 10 (1981) や D. S. Richards, “Ibn al-Athir and the Later Parts of the Kāmil: A Study of Aims and Methods”, D. O. Morgan (ed.), *Medieval Historical Writing in the Christian and Islamic Worlds*, London 1982 等を挙げる事ができる。
- (49) 「地理書」の写本が未発見であることが, その存在を疑う最大の理由であるのは不思議なことである。ラシード以降の多くの史料にこの「地理書」への言及が見られる。中でも, 『バナーカティー史』での言及は重要であろう (白岩「『集史』研究の現状と課題」, pp.182-

- 83)。他史料における言及に関しては、別の機会にゆずることにする。
- (50) 岩武「研究動向」, pp.59-60.
- (51) Ḥamd-allāh Mustaufi, *Tārīkh-i Guzīda*, ed. ‘Abd al-Ḥusain Nawā’i, Tehrān 1362/1983, p.815.
- (52) 赤坂氏の分析がそのヒントとなる(註(1)参照)。また、『集史』第1巻に対する第三者による加筆に関しては、古くは Barthold, *Turkestan*, pp.47-48 で触れられ、近年でも J.Aubin, “Le patronage culturel en Iran sous les Ilkhans. Une grande famille de Yazd”, *Le monde iranien et l’Islam* 3(1975), p.111, J. E. Woods, “Timur’s Genealogy”, *Intellectual Studies on Islam*, Salt Lake City 1990, pp.94-95 などの分析がある(岩武昭男「書評：本田実信『モンゴル時代史研究』【オリエント】34-2 (1991), pp.146-47,147-48 (n.3, 8) 参照)。
- (53) 岩武「指示書」, pp.293, 300.
- (54) 註58の『コーラン注解の鍵』補遺に関する「内容目次」との関係も参考になる。なお、本稿の分析は、ラシードの著作に関して、第2次『著作全集』の編纂時(712年)以前の書写写本の存在をもちろん否定しないが、存在した場合には、書写自体がラシードの意向の下でなされた極めて貴重で特殊な写本であることを予想させる。この時点以前の写本として『集成』パリ写本(710年書写)と『真理の明示』イスタンブル写本(711年書写)の存在が知られているが、いずれも「バグダード紙大判」サイズの大型写本であり、前者は最高品質の豪華本であることが知られ、後者の書写生はラシード区ワクフ文書の証人の一人にもなっていることが考えられる人物である(上記に関して、岩武「研究動向」, pp. 57, 66-67 (nn.7-11)参照)。「第1次」『著作全集』に基づき「写本作成指示書」第1ヴァージョンに従うと想定できることになろう。一方、かつて706年ともいわれてきた『集史』アラビア語版のエディンバラ大学所蔵写本の書写年に関しては、完全に否定されているといつてよい(van Ess, *Der Wesir und seine Gelehrten*, p.7 (n.33), Blair, *A Compendium of Chronicles*, pp.16-23)。

- (55) 本田『モンゴル時代史研究』にまとめられている。
- (56) 本稿では、『集史』のテキストそのものには距離をおいて論じてきたが、ここで『集史』の記述に基づき、註1に挙げた諸研究に対して次の一点のみを反証として挙げておく。『集史』「部族編」は、「オグズ」および「ウイグル」の密接に関連した2つの章を含んでいるが、周知のように、『集史』第2巻には「オグズ」伝が別に存在している (cf. K. Jahn, *Die Geschichte der Oguzen des Rašid ad-Dīn*, Wien 1969)。そして、この「部族編」中で、「オグズ」章では、「その話を、詳細かつ拡大して、この祝福された歴史書の続編 (dhail-i in tāriḫ-i mubārak) とするつもりである (khwāhim sākht)」, 「彼らの歴史が、別に、この祝福された歴史書の続編に入るであろう (khwāhad āmad)」と2カ所で第2巻の「オグズ」伝の執筆が予告され、「ウイグル」章では、「別の歴史書が、この祝福された歴史書の続編となされた (gardānida āmada)」と1箇所での執筆が報告されている (*Jāmi' al-Tawāriḫ*, ed. Muḥammad Raushan-Muṣṭafā Mūsawī, 4 vols., Tehran 1373/1994, vol. 1, pp.55, 61, 138)。したがって、第1巻の「部族編」中の少なくともウイグル関連の記事は、オルジェイトゥ時代にその続編の第2巻の執筆が計画され実行されたのと平行して執筆されたことになる。そして、これらの記述は、志茂智子、志茂碩敏両氏が分析の対象とし、白岩一彦氏が比較の対象とする「イスタンブル本」(Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi, Revan 1518, cf. F. E. Karatay, *Topkapı Sarayı Müzesi Kütüphanesi Farsça Yazmalar Kataloğu*, Istanbul 1961, p.53 (no. 139))でも記載されている(ff.12a, 13b, 28b)。このウイグル関連の記事のみ後に書かれた記述であるか、ガザン時代に既に続編の計画とその実行があったことが証明されない限り、「イスタンブル本」がガザン時代に編まれた「原初『モンゴル史』」を保存する写本であるとする志茂智子、志茂碩敏両氏の説は成立しえない。さらに、上の情報に基づけば、「部族編」がむしろ後に付加された記述である可能性が極めて高くなり、この場合、「部族編」を『集史』の最古層かつ最重要箇所とアプリオリに規定して、この箇所のみを分

析対象とする3氏の研究の方向性そのものに疑問が生じることになる。なお、「部族編」「オグズ」章に関しては、本田氏の訳が既に提出されている(本田実信・小山皓一郎「オグズ=カガン説話Ⅰ」『北方文化研究』7(1973))。また、紙幅の関係で『集史』の写本群に関する筆者の考えをここで論じる余裕はないが、「イスタンブル本」(イスタンブルには他にも『集史』同時代重要写本が存在し、この名称自体も変更が必要である)が、ラシードがムタワッリーに就いていたバグダードのガザニーヤ・マドラサに起因する可能性があることを指摘しておきたい(岩武「研究動向」p.66(n.6),「指示書」pp.290-91参照)。

(57) 第2次の『著作全集』編纂以降のラシードの著作として『書簡集』がある。これは『問答』と同様にラシードの被保護者によって編纂されたものである。現在では受け入れられない、この書の偽書説に関しては、岩武「研究動向」, p.68(n.23)参照。また、『著作全集』に収録されることのなかったモンゴル語の著作数点があったことも判っている(岩武「研究動向」, p.59参照)。そして、『集史』の剽窃問題も、より合理的な説明が待たれるところである。

(58) 『コーラン注釈の鍵』第5論文は、現存パリ写本では“Fi'l-baḥṭh al-wāqī' baina'l-muslimin wa-ahl al-kitābain wa-ahlal-tanāsukh”「ムスリムおよび啓典の民と輪廻の信仰者との間の論争に関して」というタイトルを有しているが(Majmū'a/Paris:193b-98b), この論文は本来、『全集』「内容目次」では、“Fi ibṭāl al-tanāsukh wa-ithbāt ḥashr al-ajsād”「輪廻の否定と肉体の復活の証明に関して」のタイトルを有していた(Quatremère, *Histoire des Mongols*, p. cli. なお, van Ess, *Der Wesir und seine Gelehrten*, p.16が“ajnad”とするのは誤り)。現存パリ写本ではタイトルが変更になっているが、輪廻と否定に関しての中心となる論文である。さらに、『コーラン注解の鍵』補遺の導入部には、次のように書かれている。

我々が『コーラン注解の鍵』と名付けられた我らの書を執筆し、それに「輪廻の否定と肉体の復活に関して」の論文を加え、次いで、その完成後に“Nafā'is al-afkār”「思考の宝玉」と名付けた

論文を著し、これをその論文の再論 (dhail) としたときに、その書は既にかき上げられておりその写本も多く作られていたゆえに、それに続けて [挿入して] 書くことは我々にとって容易ではなかった。ために、我々は「内容目次」の余白に説明したように、その位置を最後においたのである。いま、この論文を、その書を完結させるために書く。(Majmū'a/Paris: 200a)

[[「内容目次」では、『スルターン対話』最終箇所にか『コーラン注釈の鍵』の再論としての「思考の宝玉」のタイトルを見ることができ (Quatremère, *Histoire des Mongols*, p.cliiii, Majmū'a/Paris:2a)]

この補遺も輪廻と復活に関する再論であり (これはまた『スルターン対話』補遺としても再録されている)、さらにその再論の『真理の明示』第14論文が直接に論じることになる。そして、存在を論じる『注釈集』第2論文は、上記の『コーラン注釈の鍵』第5論文において参照指示がなされており、関連論文として考えることができ、同書第3論文は、その注釈である。また、関連して『注釈集』第11論文、『真理の精妙』第5論文が復活について論じている (van Ess, *Der Wesir und seine Gelehrten*, pp. 14, 16, 20, 19, 42)。

(59) 岩武「研究動向」, pp.67-68(n.18)。「インド史」に引用された論文 (現在では Blair, *A Compendium of Chronicles*, pp. 278a-81b にカラーで見ることができ) は、前注に挙げた『コーラン注解の鍵』第5論文のバリ写本版と、『注釈集』第2論文の参照指示や援用のコーランとハディースが一致しているが、構成や表現がずれる箇所も多く、タイトルの変更があったことも考えると、別バージョンであった可能性もある。現時点では結論を控えておきたい。

(60) 最新の概観として、註3に挙げた Aubin, *Émirs mongols et vizirs persans* を挙げるができるが、その他に、T. T. Allsen, “Changing Forms of Legitimation in Mongol Iran”, G. Seaman and D. Marks (eds.), *Rulers from the Steppe. State Formation on the Eurasian Periphery*, Los Angeles 1991 がある (ただし同論文は細部で誤解も多く利用には注意を要する)。なお、

ガイハトゥの仏教名に関しては, *ibid.*, p.239 (n.37) 参照。彼自身のヤルリグも, この仏教名 *Irinjindorji* で発布していた可能性もある (A. Soudavar, *Art of the Persian Courts*, New York 1992, pp.34-35)。